

ペスをさがしに

小川未明

青空文庫

土曜日どようびの晩ばんでありました。

お兄さんにいも、お姉さんねえも、お母さんかあも、食卓ちやぶだいのまわりで、いろいろのお話はなしをして、笑わらつていらしたときに、いちばん小さい政ちゃんまさが、

「ぼく、きょうペスを見たみよ。」と、ふいに、いいました。

すると、みんなは、一時じにお話はなしをやめて、政ちゃんまさの顔かおを見みました。

「政ちゃんまさ、ほんとうかい。」と、正ちゃんしょうが叫さけびました。

「ほんとうに、見みたよ。」と、政ちゃんまさは、まじめくさつて答こたえました。

「まあ、逃にげてきたんでしようか？」と、姉さんねえは、おどろいた顔かおつきをなさいました。

「ペスなら、逃にげてきたんでしよう。よく逃にげてこられたものね。」と、お母さんかあは感かん心しんなさいました。

「ペスでない、きつとほかの犬いぬだよ。政ちゃんまさは、なにを見みたのかわかりやしなない。」と、いちばん上うえの達たつちゃんちゃんが、いいますと、

「うそかい、ぼく、ほんとうに、見みたんだから。」と、政ちゃんまさは、目めをまるくしました。みんなが、そう疑うたがうのも、無理むりはありません。昔むかしから、犬いぬ殺ころしにつれられていて、

帰^{かえ}ってきた犬^{いぬ}は、めつたにないからです。

「お母^{かあ}さん、ほんとうでしょうか。パスだったら、いいけど。」と、お姉^{ねえ}さんは、いいま
した。

「パスだったら、うちで、飼^かってやろうね。」と、正^{しょう}ちゃんがいました。

「印刷^{いんさつ}屋^やの犬^{いぬ}じゃないか。」

「だって、あそこでは、もうかまわないのだから、どこ^{いぬ}のうちの犬^{いぬ}でもないだろう。」

お兄^{にい}さんたちは、この後^{のち}、パスをどうしてかばってやったらいいかと議^ぎ論^{ろん}をしました。

「まだ、ほんとうに、パスかどうか、わかりやしないじゃないの。」と、お姉^{ねえ}さんが、い
いますと、お母^{かあ}さんは、ほんやりとして、お兄^{にい}さんたちの話^{はなし}をきいている、政^{まさ}ちゃんを
らんになつて、

「もう、政^{まさ}ちゃんは、ねむいんでしょう。きつとパスの帰^{かえ}ってきた、夢^{ゆめ}でも思い出^{おも}して、
いったのでしよう。」と、笑^{わら}いながら、おっしやいました。

「あるいは、そんなことかもしれん。」と、いままでパスの今後^{こんご}の相^{そう}談^{だん}をしていた、達^{たつ}
ちゃんと正^{しょう}ちゃんは、そのほうの話^{はなし}を中^{ちゆう}止^しして、もつと、くわしいことを知る^しために、
「政^{まさ}ちゃん、どこで、パスを見^みたんだい。」と、ま^まず正^{しょう}ちゃんは、た^たずねました。

「橋のところで、遊んでいて、見たんだよ。」

「政ちゃん、ひとりしか、パスを見なかった？」と、正ちゃんは、さらに、ききました。

「健ちゃんも、徳ちゃんも、みんな見たから……。」と、政ちゃんは、疑われるのが、不
平でたまらなかつたのです。

「じゃ、明日、徳ちゃんなんかにきいてみるよ。うそなんかいたら、承知しないから

。」と、正ちゃんが、いいますと、

「なにも、怒ることはないでしょう。」と、お姉さんが、正ちゃんをにらみました。

「だって、うそをつくことは、わるいことじゃないか。」

「うそをつこうと思つていつたのでない。まちがいということとは、あるものでしょう。」
と、お姉さんが、いいなされると、

「まちがいじゃない、ほんとうに、パスだったよ。」と、政ちゃんは、頭を振つて、がん
ばりました。

お母さんも、お姉さんも、政ちゃんの、いつにない真剣なようすを見て、おかしそ
うに、お笑いになりました。

「なぜ、政ちゃんは、パスを呼ばなかつたのだい。」と、いちばん年上の達ちゃんが、

こんどは、たずねました。

「ぼく、ペス、ペスと呼んだよ。」

「そうしたら。」

「こつちを、じつと見たよ。」

「飛んで、こなかったかい？」

「いくら、呼んでも、こなかった。そして、とつとと、あっちへ行ってしまった。」と、政ちゃんが答えました。

「どつちの方へ、行ってしまつたい。」と、だまつてきいていた、正ちゃんが、ききましました。

「原っぱの方へ、川について、とつとと、行ってしまつたよ。あつちの、赤い空の中へ、はいつていつてしまつたよ。」

政ちゃんは、寒い、木枯らしの吹きそうな、晩方の、なんとなく、物悲しい、西空の、夕焼けの色を、目に描いたのです。

「どつちから、ペスが、歩いてきたか、知っている？」と正ちゃんは、政ちゃんに、たずねました。

「市場の方から、歩いてきた。」

「そのとき、ほかの子は、パス、パス、と呼ばなかったの。」と達ちやんがききました。

「呼んだとも、健ちやんも、徳ちやんも、呼んだけれど、パスは、振り向かんでいつてしまつたよ。」

お母さんも、お姉さんも、政ちやんの、そういうのをきくと、はたしてパスが帰つてきたのかしらんと考えるようになりました。そして、子供たちの話を、いまは、じつときいていられたのであります。

「おかしいね、あんなに、いつも、走つてきて飛びつくのに、呼んでも、こないのは……」と、達ちやんが、頭をかしげました。

「おかしいね。やはり、パスでは、ないんだろう。」と、正ちやんがいました。

「パスだよ。」

「そんなら、どうして、呼んでもこなかったのだい、政ちやんにわかる？」と、正ちやんが、いいました。政ちやんはだまつていました。お母さんも、お姉さんもしばらく、政ちやんの顔を見ていられました。

政ちやんは、頭の中では、わかっているが、どう言葉に、あらわしたらいいかと、惑つ

ているようすでした。が、どもりながら、

「また、人間にんげんが、だますと思おもったから、こなかったのだろう……。」と、いいました。

「だますから？」と、正しょうちゃんが、ききかえすと、

「政まさちゃんのいうことは、よくわかるじやないの。いつも、あんなに、かわいがっていて、見殺みころしにしたからというのだよ。」と、お姉ねえさんは、目めに、涙なみだがためていらつしやいました。

「ほんとうに、そうだな。すぐにわかったら、もらいにいってやればいいに、印刷屋いんさつやでも、うちでも、まただれも、犬殺いぬころしにつれられていったぎり、もらいにいってやらなかったのは悪いわると思おもう。」と、達たつちゃんも、同意どういしました。

ひとり、達たつちゃんばかりではありません。みんなは、政まさちゃんの、いうことをきいて、ほんとうだと思おもいました。平常ふだん、かわいがつていながら、ペスが、犬殺いぬころしに、つれられていったと知しっても、もらいにいってやらぬというのは、なんたる不人情ふにんじょうなことだろう。ペスは、心こころのうちできつとだれかもらいにきてくださると思おもっていたのにちがいない、そして、とうとうだれもきてくれないと知しると、死しにもの狂ぐるいで逃にげ出だしてきたのだ。心こころのうちで、みんなの不人情ふにんじょうをうらんでいるのだ。もうけつして、人間にんげんを信しんじてはならな

い。それは、政ちゃんまさの、いうとおりだおもと思おもったからです。

「まあ、それにしても、よく逃げ出だして、きたものね。」とお姉ねえさんは、感嘆かたんなさいました。

「生いきたい、一念ねんで、逃にげ出だしてきたのでしよう。」と、お母かあさんも、おっしやいました。

「ワン、ワン、ほえたり、かみついたりしたんだらうな。」と、正しょうちゃんが、いうと、

「ぼか、そんなことをすれば、すぐなぐり殺ころされてしまうじやないか。」と、達たつちゃんが
いいました。

「そんなら、どうして、逃にげてきたんだい。」と、正しょうちゃんが、ききました。

「すきを見て、いつしようけんめいに逃にげてきたんだらう。」と達たつちゃんがいいました。

その夜よは、ペスが帰かえってきたことにして、みんなは、いろいろ話はなしをしましたが、夜よが、
明あけたら、それを、たしかめようと、達たつちゃんとは、めいめい胸むねに思おもって、
やがて、床とこの中なかに入はいったのであります。寒さむい晩ばんで、木枯こがらしの音おとがきこえていました。床とこ
にはいつてからも、正しょうちゃんは、風かぜの音おとに耳みみをすまして、逃にげてきた、かわいそうなペス
のことを思おもって、なかなか眠ねむりつかれなかつたのでした。

翌よく日は、日曜にちようび日びでした。朝飯あさはんを食たべると、正しょうちゃんは、外そとへ駆かけ出だしてゆきまし

た。往來で、徳ちゃんたちが、遊んでいました。徳ちゃんは、政ちゃんと同じ年ごろでした。

「徳ちゃん、ペスが帰ってきたつて、ほんとうかい。」

「正ちゃんは、徳ちゃんの顔を見ると、すぐこうたずねました。」

「ああ、昨日見たよ。」と、徳ちゃんは答えたのです。

「ほかの犬だろう。」

「そうじゃない、ペスだよ。日の丸が、ついていた。」と、徳ちゃんは、いいました。

「日の丸が、ついていた？」と、正ちゃんは、念を押しました。日の丸というのは、ペスの白い脊中に赤い毛のまるい斑があつたので、みんながそういつていたのです。

「日の丸があつたよ。」と、徳ちゃんははつきり答えました。

そうきけば、もうペスの帰ってきたのに、疑う余地がなかつたのです。正ちゃんは、走つて、家へもどると、その話を達ちゃんにしたのです。

ちようど、そのとき、小田と高橋が、釣りざおとバケツを下げて達ちゃん兄弟を誘いにきました。日曜日に、川へ寒ぶなを釣りにゆく、約束があつたからです。

「どうしよう？ ペスをさがしにゆくのをよして、釣りにゆこうか。」と、正ちゃんは、

兄の達ちやんを見上げました。

「おまえは、釣りにいつてもいい。僕は、ペスをさがしにゆくから。」と、達ちやんが答えました。

小田も、高橋も、よくペスのことを知っていました。達ちやんと正ちやんの話をきくと、

「僕たちも、いつしよに、ペスをさがしにゆこう。そして、はやく見つかったら、みんなで釣りに出かけよう。」と、小田がいますと、高橋も賛成しました。

「釣りざおとバケツを、ここに置いてくれない。」

やがて、みんなが、一団となつて、ペスをさがしにゆきました。その中に、小さい政ちやんもはいつていました。

橋のところから、ペスのいったという、道を歩いて、原つぱへ出て、半分は、散歩の気分、愉快そうに話しながら、足の向く方にあるいていたのであります。

あちらに、自動車や、自転車の走っているのが見える、駅の付近にきたとき、

「ほら、あすこに、ペスがいるじやないか。」と、ふいに政ちやんが、指さしました。見ると、なるほど、牛肉屋の前に白い毛に日の丸の斑のはいつた、ペスそっくりの犬がい

ました。

「ペスカしらん。」と、正ちゃんしょうちゃんは、駆け出してゆきました。あとから、みんながつづきました。しかし、その犬いぬは、ペスと兄弟きょうだいのように似ていたけれど、やはり、ペスではありませんでした。政ちゃんまさちゃんや、徳ちゃんとくちゃんの見たみのは、この犬いぬだとわかると、みんなは道みちをもどることにしました。

「ああ、ペスは、もう殺ころされてしまったのだろう。」と行って、中なかにも、達ちゃんたつちゃんと正ちゃんしょうちゃんは、ペスを助たすけなかつたのを、後悔こうかいしながら、木枯こがらしの吹ふく中なかを、みんなと歩あるいていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「児童読物研究」

1933（昭和8）年2月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ペスをさがしに

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>